

チベット語の未完了継続相の助動詞句の歴史的推移¹ —古チベット語から現代チベット語まで—

星 泉

Historical Transition of Existential Auxiliary Verb Phrases in Tibetan Texts

HOSHI Izumi

Abstract : This paper examines the historical transition of existential auxiliary verb phrases, such as *=cing yod*, *=gin yod*, *=gi yod*, and *=bzhin yod*, used in Tibetan texts. Although the functions of existential auxiliary verb phrases have been studied in Tibetan linguistics, their historical transition has not yet been examined. This paper provides the frequency data of each existential auxiliary verb phrase used in Old, Classical, and Modern Tibetan texts. The data suggest the following: (1) Existential auxiliary verb phrases were used in Old Tibetan texts; however, their frequency was extremely low and increased markedly in Modern Tibetan texts. (2) The verb *mchis* was the most frequently used existential verb; however, it disappeared in Classical Tibetan texts and was replaced by the verb *yod*, which was the most frequent existential verb in Modern Tibetan texts. (3) Finally, the conjunction *=cing* was the most frequent particle in Old Tibetan texts; however, new conjunctions, such as *=gin* or *=gi*, appeared in Classical Tibetan texts. In the 19th century texts, there was only one example wherein *=bzhin* was used as a conjunction (i.e., *=bzhin yod*) ; this eventually played a key role in the distribution of existential auxiliary verb phrases in modern Tibetan literature.

关键词：藏语语法，时态，古藏语，古典藏语，現代藏语

Keywords: Tibetan grammar, aspect, Old Tibetan, Classical Tibetan, Modern Tibetan

¹ 本稿は京都大学人文科学研究所共同研究 A 「チベット・ヒマラヤ文明の史的展開の学際的研究」(代表者：岩尾一史)、科研費基盤研究 (A) 「チベット語最古層の形成とその構造推移—データベース解析による辞書と歴史文法の編纂」(代表者：武内紹人、課題番号24242015) および東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3) で行った研究成果の一部である。本稿の内容は International Seminar on Tibetan Languages and Historical Documents (2017年9月8日、神戸市外国語大学) で行った発表内容に改訂を加えたものである。発表の際に有益な質問やコメントをいただき、本稿執筆の際にも参考にさせていただいた。ここに記して御礼を申し上げる。

1 はじめに

現代チベット語では、口語、文語を問わず、アスペクトやモダリティを表す表現形式として、助動詞（句）が頻繁に用いられるが、それらは歴史的に見れば比較的新しいものである。ある形式がいつ頃から文献に登場するようになったのかについては明確には知られていない。チベット語の電子テキストがある程度蓄積されてきた現在、古チベット語から現代チベット語までを射程に入れ、特定の形式の使用頻度の変化を確認しておくのは意味があるだろう。

書写チベット語では、事態が進行中であるか、習慣・反復的に行われている事態は、助動詞句を用いずに、本動詞の未完了形（他動詞の場合は未完了能動形）のみによって表すことが可能である（星 2016：162）。14世紀に編纂された歴史物語、『王統明鏡史』（*rgyal rabs gsal ba'i me long*、略称 GSM）にもとづく筆者の研究によれば、例えば以下のような用例がそれに当たる。

- (1) *mchod.pa* *'bul=zhing* *smon.lam* *'debs=so*²
 N V:HUM:IPF:A=CONJN N V:IPF:A=TERM³
 供物 捧げて 祈願 している
 「(王は毎日) 供物を捧げ、祈願を続けていた」(GSM)

- (2) *de.dag=rnam*s *ma-mthun=par* *rtsod.pa* *byed=do*/
 DEM=PL NEG-V=CONJN N V:IPF:A=TERM
 それら 一致せず 争い していた
 「彼らは互いに反目して争っていた」(GSM)

上記の用例では、動詞はいずれも未完了・能動形であり、その後ろに助動詞

² 本稿ではチベット語は Wylie 方式にもとづく転写表記で示す。ただし例文番号付きの用例を提示する箇所では、記述言語学の表記にならい、Wylie 表記にない表記を使用している。具体的には単語内の形態素境界には「_」、また文法形式のうち、いわゆる付属語にあたる接語の境界は「=」、接辞の境界は「-」を用いている。本文中で接語を示す際にも *=cing*、*=gin* のように記号「=」を用い、それが接語であることを示している。

³ 本稿で例文を示す際には Wylie 方式による転写表記の下にその語または句の機能を明確にするための文法グロスを表記している。文法グロスで用いた略号については巻末の略号表を参照されたい。またその下にはその語または句の直訳を示し、最下段の「」内に日本語訳を提示している。

または助動詞句を伴うことなく、文終止の終助詞が後続しているのみである。内容はいずれも日々の習慣的行為ないし継続して行われている事態を表している。

一方、同じ文献の中でも、動詞の後に助動詞句を伴って、習慣的行為ないし継続して行われている事態を表している事例もある。例えば以下の用例をご覧ください。

- (3) *lus.dri zhim=pas g.yu='i sbrang.ma gcig 'khor=gin yod/*
 N V=CONJN N=GEN N N V:IPF[=CONJN EXT]*prog*
 体臭 匂やかで トルコ石色の 蜂 1 飛び回っている
 「(皇女は) 身体からいい香りがするため、(まわりを) 一匹のトルコ石色の蜂が飛び回っています」(GSM)

- (4) *ma.he=ni nyin.mo='i rigs=la nags.khrod ya.gir 'gro='i 'dug=go/*
 N=TOP N=GEN N=DAT N DEM:TRNS V:IPF[=CONJN EXT]*prog=TERM*
 水牛は 昼間の 類に 森の中 あちらに 行っている
 「(あの) 水牛は (毎日) 昼間、あちらの森に行っています」(GSM)

用例(3)は普段から皇女のまわりを蜂が飛んでいるということを表したものである。また、用例(4)は水牛の毎日の様子を述べたものである。動詞は未完了形を用い、その後ろに接続助詞と存在動詞からなる助動詞句を伴っている。

『王統明鏡史』においては、上述のような助動詞句は少数だが用いられている。では、これらの助動詞句は古チベット語で既に用いられていたのかどうか、また、文献での使用はいつごろから増加していくのかについて検討したい。

具体的な方法としては、書写チベット語における未完了・継続相の助動詞句を取り上げ、各時代の代表的な文献における使用頻度と歴史的推移を明らかにする。

2 研究対象

2.1 未完了・継続相の助動詞

本稿で取り上げる未完了・継続相の助動詞句とは、動詞未完了形に各種接続助詞が付され、さらに存在動詞が後続するタイプのものである。

様々な時代を扱うため、上記の位置に立ちうる接続助詞は全て対象とする。すなわち、*=cing* またはその交替形式 (*=zhing*、*=shing*)、*=gin* またはその交替形式 (*=gyin*、*=kyin*、*=yin*)、*=gi* またはその交替形式 (*=gyi*、*=kyi*、*=i*、*=yi*)、そして *=bzhin* である。また、存在動詞としては、*mchis*、*gda'*、*yod*、*'dug*、*yod par red* を対象とする。

2.2 先行研究

これらの助動詞句の機能については、Bacot (1948)、Skal bzang 'gyur med (1981)、稲葉 (1986)、Beyer (1992)、山口 (1998)、Denwood (1999) をはじめとする多くの先行研究がある。助動詞 (句) 類の歴史的な形成過程については、武内 (1990) で触れられており、また Zeisler (2004) では古チベット語から現代諸方言まで視野に入れた幅の広い研究を展開している。しかし、本稿で取り上げるような、チベット語文献における未完了・継続相の助動詞句に関する使用頻度の歴史的推移に関しては、星 (2010) が一部着手しているものの、筆者の知る限り取り組みがなく、本稿が先駆的な研究である。

2.3 研究方法

出現頻度の研究を行うためには電子テキストを用いる必要がある。どのようなテキストを利用するかによって結果が異なってくるため、その選択には慎重を期さねばならない。現段階では利用できる電子テキストが限られているが、古チベット語から古典チベット語、現代チベット語まで、可能な限りバランスよくるように考慮した。具体的なテキストについては後述する。

出現頻度の算出については、独自に作成した KWIC (Key Word In Context) コンコーダンサーを利用し、文献ごとに各形式の出現頻度を数えて記録するという方法をとった。そしてその集計結果をもとに、各形式の歴史的推移を検証した。

2.4 データ

利用したデータは、古チベット語（10世紀以前のチベット語）、古典チベット語（11世紀から19世紀までのチベット語）、現代チベット語（20世紀以降のチベット語）からなる。

古チベット語は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で運営されている専用の検索サイト Old Tibetan Documents Online (<http://otdo.aa-ken.jp>) を利用した。ここでは、年代記、祈願文、古い文書、葬送儀礼、契約文書など、様々なジャンルの文献を検索することができるが、特徴は、仏教文献が含まれていないという点である。サンスクリットからの直訳調ではないチベット語文献が多く含まれているといえる。

古典チベット語は以下の文献を用いた。一見してわかる通り、時代によるばらつきは否めず、今後さらなる研究を進めるためには改善が必要であるが、一定の傾向を読み取れる可能性を重視し、不十分であることを承知で利用した。

表1 本研究で用いた古典チベット語の文献一覧

時期	略称	文献名	底本
11世紀	KKh	<i>bka' chems ka khol ma/</i>	甘肅民族出版社版
14世紀	GSM	<i>rgyal rabs gsal ba'i me long/</i>	民族出版社版
14世紀	RPS	<i>rlangs kyi po ti bse ru rgyas pa/</i>	西藏古籍出版社版
15世紀	MLR	<i>mi la ras pa'i rnam thar/</i>	大谷大学所蔵版
15世紀	DNg	<i>deb ther sngon po/</i>	四川民族出版社版
16世紀	KGT	<i>mkhas pa'i dga' ston/</i>	民族出版社版
19世紀	GZh	<i>dga' bzhi ba'i rnam thar/</i>	西藏人民出版社版

現代チベット語は以下の文献を用いた。古典チベット語と同様、時代やジャンルによるばらつきは否めないが、バランスをなるべくとるよう考慮した。

表2 本研究で用いた現代チベット語の文献一覧

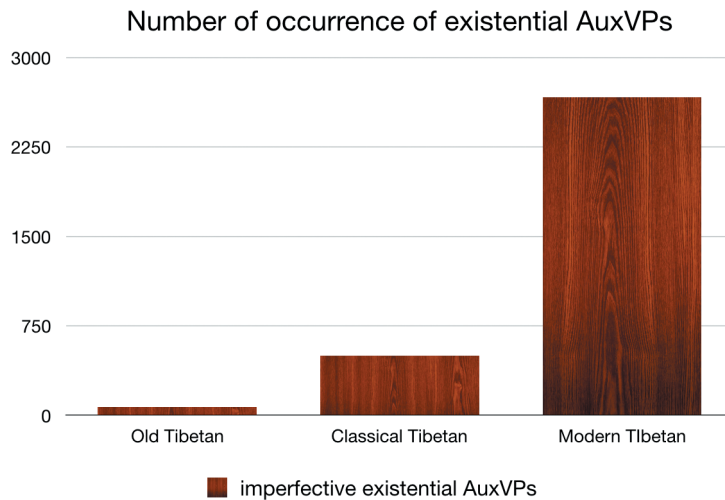
時期	略称	文献名	底本
1960年代	MZT 3	<i>ma'o tse tung gi gsung rtsom gces bsdus/ (pod gsum pa/)</i>	民族出版社版

1960年代	DL14	<i>ngos kyi yul dang ngos kyi mi mang/</i>	Tibetan Cultural Printing Press 版
1960年代	ZhG	<i>bod kyi srid don rgyal rabs/</i>	T. Tsepal Taikhang 版
1980年代	DG 2	<i>dpal don grub rgyal gyi gsung 'bum/</i> (<i>pod gnyis pa/</i>)	民族出版社版
1990年代	WD	<i>bkras zur tshang gi gsang ba'i gtam</i> <i>rgyud/</i>	西藏人民出版社版
1990年代	TP	<i>phal pa'i khyim tshang gi skyid</i> <i>sdug/</i>	西藏人民出版社版
2000年代	TD	<i>rlung dmar 'ur 'ur/</i>	著者提供
2010年代	LG	<i>bod kyi gces phrug/</i>	民族出版社版

3 出現頻度の計量結果

まず、古チベット語、古典チベット語、現代チベット語とで、該当する助動詞句の頻度がどれほど異なるかについてみておこう。

図1 時代ごとの助動詞句の使用頻度概要



資料の量が異なるので、単純な比較はできないが、古チベット語や古典チベット語と比較すると、現代チベット語では明らかに頻度が増加している。こ

の状況を踏まえた上で、それぞれの時代ごとの出現頻度の詳細を確認する。

3.1 古チベット語における未完了助動詞句の出現頻度

古チベット語における、未完了助動詞句の出現例を見てみよう。

この時期の未完了・継続相の助動詞句の特徴として注目すべきは、接続助詞として用いられる形式が =cing またはその交替形式のみ、という点である。

- (5) *mchi ma khrag=du ngu=zhing mchis//*
 N N=TRNS V:IPF[=CONJN EXT]*prog*
 涙 血として 泣いていた
 「血の涙を流していた」(P.t. 1040)⁴

- (6) *sha=la=ni za/ grag=ni 'tung=zhing mchis/*
 N=DAT=AP V:IPF:A N=AP V:IPF[=CONJN EXT]*prog*
 肉には 食べ 血は 飲んでいた
 「肉は喰らい、血は飲んでいた」(P.t. 1134)

- (7) *rgan.mo ngu=zhing 'dug=pa.las/*
 N V:IPF[=CONJN EXT]*prog*=CONJN
 老女 泣いているばかりで
 「老女は泣いているばかりで」(P.t. 1047)

- (8) *phag 'isho=zhing 'dug*
 N V:IPF[=CONJN EXT]*prog*
 豚 飼っている
 「豚を飼育していた」(P.t. 1068)

OTDO の検索結果にもとづく出現頻度を表にまとめると以下のようなになる。

⁴ 例文末尾に出典を示す。OTDO の場合は文献名を示す。例えば P.t. とあるものはフランス国立図書館に所蔵されているペリオ蒐集文献の番号である。古典チベット語以降の文献については表 2 に示した略号で示す。

表3 古チベット語における未完了・継続相助動詞句の出現頻度

	<i>mchis</i>	<i>gda'</i>	<i>yod</i>	<i>'dug</i>	<i>yod pa red</i>
V= <i>cing</i>	38	2	1	33	0
V= <i>gin</i>	0	0	0	0	0
V= <i>gi</i>	0	0	0	0	0
V= <i>bzhin</i>	0	0	0	0	0

全体として、助動詞句の用例は少ないといえる。また、助動詞にも偏りがあり、特に V=*cing mchis* と V=*cing 'dug* の出現頻度の高さが際立っている。少数ながら、V=*cing gda'* および V=*cing yod* の用例が見られた。後代になると多数出現する V=*gin*、V=*gi* の用例が一切見られないというのも特徴である。

3.2 古典チベット語 (11-16世紀) における未完了・継続相助動詞句の出現頻度

次に、古典チベット語のうち、16世紀までの文献における、未完了・継続相助動詞句の出現例を見てみよう。接続助詞に着目すると、用例 (9) (10) では =*cing* が、用例 (11) では =*gin* が、そして用例 (12) では =*gi* の交替形式としての =*i* が用いられているのがわかる。また、助動詞に注目すると、用例 (9) (11) では *yod* が、用例 (10) (12) では '*dug* が用いられている。

- (9) *chos zab.mo stong.pa.nyid=la mos.pa byed=cing yod=dus/*
 N ADJ N=DAT N V:IPF:A[=CONJN EXT]*prog*=CONJN
 仏法 深遠な 空に 憧れ しているとき
 「深遠な教えである空の思想に憧れていたとき…」(GSM)

- (10) *ja.chang 'dren=zhing 'bul.ba mang.po byed=cing 'dug*
 N V:IPF:A=CONJN N ADJ V:IPF:A[=CONJN EXT]*prog*
 茶と酒 捧げて 贈り物 多くの している
 「お茶と酒でもてなし、たくさんの贈り物をしていた」(MLR)

- (11) *g.yu='i sbrang.ma gcig 'khor=gin yod/*
 N=GEN N NUM V:IPF[=CONJN EXT]*prog*
 トルコ石の 蜂 一 回っている
 「トルコ石色の蜂が一匹飛び回っています」(GSM)

- (12) *ma.he=ni nyin.mo='i rigs=la nags.khrod ya.gir 'gro='i 'dug=go/* = (4)
 N=TOP N=GEN N=DAT N DEM.TRNS V:IPF[=CONJN EXT]_{prog}=TERM
 水牛は 昼間の 類に 森の中 あちらに 行っている
 「(あの) 水牛は (毎日) 昼間、森に行っています」

表1に挙げたうち、11世紀から16世紀までの6つの文献調査にもとづく未完了・継続相の助動詞句の出現頻度を表にまとめると以下のようなになる。

表4 古典チベット語 (11-16世紀) における未完了・継続相助動詞句の出現頻度

	<i>mchis</i>	<i>gda'</i>	<i>yod</i>	<i>'dug</i>	<i>yod pa red</i>
V= <i>cing</i>	2	2	54	98	0
V= <i>gin</i>	0	1	53	39	0
V= <i>gi</i>	0	3	55	99	0
V= <i>bzhin</i>	0	0	0	0	0

古チベット語でもっとも使用例の多かった V=*cing mchis* が2例に後退し、そのかわりに V=*cing yod* および V=*cing 'dug* の出現頻度が高くなっている。さらに、V=*cing* の他に V=*gin*、V=*gi* の用例が増加している点が注目される。V=*bzhin* の用例は1例も見られなかった。

3.3 古典チベット語 (19世紀) における未完了継続相助動詞句の出現頻度

続いて19世紀の文献『ドリン・パンディタ伝』(GZh) における未完了・継続相助動詞句の出現頻度を観察する。接続助詞に着目すると、用例 (13) (14) では =*gi* またはその交替形式が用いられている他、用例 (15) にあるように、前節で扱った文献には見られなかった =*bzhin* が見られるという点が特筆すべきである。助動詞に注目すると、用例 (13) (15) では *yod* が、用例 (14) では *'dug* が用いられている。

- (13) *'thung mi-'dod=pa=zhiḡ yong=gi yod=stabs/*
 V:IPF NEG-V=NMLZ=INDF V:IPF[=CONJN EXT]_{prog}=TERM
 飲む ～したくなさ 生じているので
 「(いつも) 飲みたくない気持ちになるので…」 (GZh)

- (14) 'bras=kyi ljang.pa mang.po 'khur=nas zhing 'debs=kyi 'dug=pa.la
 N=GEN N ADJ V=CONJN N V:IPF:A[=CONJN EXT]_{prog}=CONJN
 米の 苗 多くの 背負って 畑 植えていたところ
 「たくさんの稲を担いで畑に苗を植えていると…」 (GZh)

- (15) dmag.mi=dang 'bras.dos=kyang shin.tu mang=ba=zhiḡ 'byor=bzhin yod=skad
 N=COM N=AP ADV V=NMLZ=INDF V[=CONJN EXT]_{prog}=HS
 兵士と 兵糧も 非常に たくさん 到着してきたそうです
 「兵士と兵糧も相当にたくさん到着してきましたそうです」 (GZh)

KWIC コンコーダンサーを用いた検索結果にもとづく出現頻度を表にまとめると以下ようになる。

表5 古典チベット語（19世紀）における未完了・継続相助動詞句の出現頻度

	<i>mchis</i>	<i>gda'</i>	<i>yod</i>	<i>'dug</i>	<i>yod pa red</i>
V= <i>cing</i>	0	0	0	0	0
V= <i>gin</i>	0	0	0	0	0
V= <i>gi</i>	0	0	38	53	0
V= <i>bzhin</i>	0	0	1	0	0

19世紀に書かれたこの文献の特徴は、未完了・継続相助動詞句の使用が、ほぼ V=*gi yod* および V=*gi 'dug* に絞られているという点である。また、特筆すべき点としては、1例だけではあるが、V=*bzhin yod* という助動詞句が用いられていることが挙げられる。

3.4 現代チベット語（1960年代）における未完了助動詞句の出現頻度

20世紀においては、1950年代以降、政治面でも教育面でも激動の時代が続き、チベット語も大きな変化を余儀なくされた。20世紀のチベット語の変化についてはよりつぶさに観察していく必要があるが、本稿では手に入る資料の限界もあるため、まずは多くの人びとに読まれ、影響力があったと考えられる『ダライ・ラマ14世自伝』(DL14)、『毛沢東選集』第3巻(MZT3)、『チベット政治史』(ZhG)を取り上げて検討する。

接続助詞に着目すると、用例(16)(17)(18)では =*gi* またはその交替形式

が、用例 (19) では *=bzhin* が用いられているのがわかる。また、助動詞に注目すると、用例 (16) (19) では *yod* が、用例 (17) では *'dug* が、また用例 (18) では19世紀以前の文献には見られなかった *yod pa red* が用いられていることが大きな特徴である。

- (16) *pha dam.pa yang.yang mjal=gyi yod/*
 N N ADV V[=CONJN EXT]*prog*
 父 亡くなった 度々 会っている
 「亡き父と何度も会った」(DL14)

- (17) *tshang.mas khyod.tshor dga'.bsu=dang gus.skur byed=kyi 'dug*
 N.ERG 2.TRNS N=COM N V:IPF:A[=CONJN EXT]*prog*
 みんなが あなたに 歓迎と 敬意 払っている
 「みんながあなたを歓迎し、敬意を払っています」(MZT 3)

- (18) *mi.dmangs=tshos ras=kyis bzos=te gyon=gyi yod pa red/*
 N=PL.ERG N=ERG V=CONJN V[=CONJN EXT]*prog*
 普通の人々が 布で 作って 身につけている
 「普通の人々は布で(着物を)作って着ている」(ZhG)

- (19) *tshan.rig=bcas=kyang slob=bzhin yod/*
 N=AP=AP V:IPF:A[=CONJN EXT]*prog*
 科学も交えて 学んでいる
 「(様々な学問に加えて) 科学も学んでいます」(DL14)

上記3点の文献にもとづく未完了・継続相の助動詞句の出現頻度を表にまとめると以下ようになる。

表6 現代チベット語(1960年代)における未完了・継続相助動詞句の出現頻度

	<i>mchis</i>	<i>gda'</i>	<i>yod</i>	<i>'dug</i>	<i>yod pa red</i>
V= <i>cing</i>	2	0	2	1	1
V= <i>gin</i>	0	0	10	4	0
V= <i>gi</i>	0	0	498	154	339
V= <i>bzhin</i>	0	0	54	11	5

まず、一見してわかるのが、19世紀の文献でも見られたのと同様の特徴、すなわち *V=gi yod*、*V=gi 'dug* の使用が他と比較して極めて多い点である。さらに、*V=gi yod* に匹敵する用例数を誇るのが、*V=gi yod pa red* である。これは19世紀以前の文献には見られなかったもので、20世紀以降に書かれるようになったものであると考えられる。さらに、19世紀の文献では *V=bzhin yod* は一回しか出現していなかったのに対し、*V=bzhin yod* が54例、さらに加えて、*V=bzhin 'dug*、*V=bzhin yod pa red* の使用例も見られることは特筆すべき点である。

ところでこの *V=gi yod*、*V=gi 'dug*、*V=gi yod pa red* の頻度のうち、大きな割合を占めているのが『毛沢東選集』（MZT）である。『毛沢東選集』のみの出現頻度を見ておこう。

表7 毛沢東選集第3巻における未完了・継続相助動詞句の出現頻度

	<i>mchis</i>	<i>gda'</i>	<i>yod</i>	<i>'dug</i>	<i>yod pa red</i>
<i>V=cing</i>	0	0	0	0	0
<i>V=gin</i>	0	0	0	0	0
<i>V=gi</i>	0	0	259	46	294
<i>V=bzhin</i>	0	0	2	0	1

『毛沢東選集』はツェテン・シャプトン (*tshe brtan zhabs drung*, 1910–1985) やムルゲ・サムテン (*mu dge bsam tan*, 1914–1993) ら、当代きつての文法家らが集められ、検討を重ねられ、翻訳が行われたとされており、平易で分かりやすい新しい文語チベット語表現が意識的に作られたものと推察される。*V=gi yod pa red* の使用はその一例であろう。後述するように、その後のチベット語教科書の状況などを見ると、『毛沢東選集』で用いられた表現が使われており、その後のチベット語の形成に対して重要な礎となった可能性がある。

3.5 現代チベット語（1980年代以降）における未完了助動詞句の出現頻度

1966年から1976年まで続いた文化大革命の時代は、上でも触れたとおり、新しいチベット語表現が意識的に作られたものと思われる。特に、文化大革命の時代に属格助詞 *=gi* の交替形式 (*=kyi*、*=gyi*) や能格助詞 *=gis* の交替形式 (*=kyis*、*=gyis*) を排除して、属格助詞は *=gi* に、能格助詞は *=gis* に統一しよう

という目論見が行われたことは『毛沢東選集』チベット語版を見ても明らかであるところである。しかし、これらには強い反発があったことが推測される。というのも、1979年以降の改革開放により、チベット語の出版物が自由に出版できるようになると、チベット語の伝統文法にもとづく、古典的な表記に立ち戻ろうという動きが見られるからである。

その急先鋒だったと考えられるのが、チベットのアムド地方における現代文学の立役者として著名なトンドゥブジャ (*don grub rgyal*, 1952-1985) である。その一方で、新しい表現も模索しているところがこの作家の興味深いところである。この両方の観点から、トンドゥブジャの作品の未完了・継続相の用例を見ていこう。

まず、用例 (20) をご覧いただきたい。ここでは *V=cing mchis* という古チベット語では主流であった形式の交替形式が用いられている。先に見たとおり、古典チベット語の時期になってこの形式はほぼ駆逐されていたが、中央民族大学の修士課程で古チベット語を学んだトンドゥブジャが現代に蘇らせたと言ってもよいかもしれない。また、古典チベット語で用いられていた形式も盛んに用いられている。例えば、用例 (21) のように *V=cing yod* の交替形式も用いられているし、用例 (22) のように古典チベット語において用いられていたことのある *V=gin 'dug* も用いられている。一方、用例 (23) のように古典チベット語にはほとんど見られなかった *V=gin gda'* という組み合わせも用いられている。さらに、用例 (24) のように19世紀の文献で一例のみ見られた *V=bzhin yod* に加え、用例 (25) のような *V=bzhin 'dug* という古典チベット語では見られなかった組み合わせも用いられている。

- (20) *dwangs.bsil=gyi chu.bo sgog.sgog=tu 'thung=zhing mchis/*
 N=GEN N N=TRNS V:IPF[=CONJN EXT]*prog*
 冷たく澄んだ 水 ごくごく と 飲んでいて
 「冷たく澄んだ水をごくごく と飲んでいて」(DG 2)

- (21) *don.dam=du kho.mo=la skrag.snang=yang skyes=shing yod/*
 N=TRNS 3 =DAT N=AP V:IPF[=CONJN EXT]*prog*
 実際に 彼女に 恐怖心も 生じていた
 「実際のところ(嫁は) 姑を恐れてさえたのだった」(DG 2)

- (22) *thag cung ring.sa=na lug.khyu=zhig ga.ler tshur yong=gin 'dug*
 N ADV N=LOC N=INDF ADV ADV V:IPF[=CONJN EXT]_{prog}
 距離 少し 離れた地に 羊の群れが ゆっくり こちらに やってきている
 「遠からぬところから羊の群れがゆっくりと戻ってこうとしている」
 (DG 2)

- (23) *snga=na med=pa'i rol.mo=zhig gtong=gin gda'/*
 N=LOC NEG.EXT=NMLZ.GEN N=INDF V:IPF:A[=CONJN EXT]_{prog}
 昔に なかった 音楽 奏でていた
 「(私の耳に) かつて聞いたことのない音楽が聞こえてきた」 (DG 2)

- (24) *mar.khe.si.ring.lugs=la'ang dad.pa byed=bzhin yod/*
 N=DAT:AP N V:IPF:A[=CONJN EXT]_{prog}
 マルクス主義にも 信奉 している
 「(仏法だけでなく) マルクス主義も信奉していた」 (DG 2)

- (25) *phyir brel 'tshub.'tshub=ngang tshur yong=bzhin 'dug*
 N.TRNS N N=CONJN ADV V[=CONJN EXT]_{prog}
 元に 焦燥 バタバタした様子で こちらに 戻ってきています
 「慌てた様子でこちらに戻ってきています」 (DG 2)

トンドゥブジャ作品集第2巻にもとづく未完了・継続相の助動詞句の出現頻度を表にまとめると以下のようになる。

表8 トンドゥブジャ作品集第2巻における未完了・継続相助動詞句の出現頻度

	<i>mchis</i>	<i>gda'</i>	<i>yod</i>	<i>'dug</i>	<i>yod pa red</i>
V= <i>cing</i>	4	0	9	21	0
V= <i>gin</i>	3	15	26	68	0
V= <i>gi</i>	0	0	10	8	0
V= <i>bzhin</i>	2	4	23	34	0

先に見た19世紀の文献とも、1960年代の文献とも全く分布が異なり、接続助詞、助動詞ともに幅広い形式が用いられているのが興味深い。少なくともトン

ドゥブジャが古チベット語から古典チベット語に至るまでの幅広い知識を持っており、1960年代の流れとは別の流れを作ろうとしていたのではないかと考えられる。

トンドゥブジャの作品はアムド地方の青少年に広く読まれ、非常に人気のあった作家であるため、彼の作品におけるチベット語使用は一定の影響を持っていたと考えられる。この点についてはこの時期の他の作家の作品とも比較しつつ、検討すべきであろう。

3.6 現代チベット語（1990年代以降）における未完了助動詞句の出現頻度

1990年代に入ると、多くの作品が発表されるようになる。長編小説に限れば、1980年代には1点しか発表されなかったのに対し、1990年代には13点の長編小説が発表され、2000年代には9点、2010年代に入ると20点近くの長編小説が発表されている。ここでは、1990年代以降に発表された長編小説のうち、中央チベットのツァン地方出身でラサ在住のオンドー（*dbang rdor*, 1934-）の作品（WD）、タシ・パンデン（*bkra shis dpal ldan*, 1960-）の作品（TP）、アムド地方出身のツェラン・トンドゥブ（*tshe ring don grub*, 1961-）の作品（TD）、ラシャムジャ（*lha byams rgyal*, 1977-）の作品（LG）を見ていこう。

中央チベット出身の作家の作品には、ラサ方言の特徴が如実に見られ、ラサの口語に特徴的な *V=gi yod*、*V=gi 'dug*、*V=gi yod pa red* が頻繁に用いられている。

- (26) *'tsho.thabs=su chang tshong=gi yod/*
 N=TRNS N V:IPF[=CONJN EXT]*prog*
 生活の手段として 酒 売っている
 「生活のために酒を売っています」(WD)

- (27) *be'u dmar.khra=zhig=gis rna.cog gnyis lheb.lheb.tu 'gul=zhing*
 N N=INDF=ERG N NUM ADV V=CONJN
 仔ヤク 赤斑のが 耳 二つ パタパタと 動きながら
 chu 'thung=gi 'dug
 N V[=CONJN EXT]*prog*
 水 飲んでいる
 「赤斑の仔ヤクが両耳をパタパタと動かしながら水を飲んでいる」(TP)

一方、アムド地方出身の作家の作品では、接続助詞の =gi は避けられる傾向にあり、そのかわり =gin yod、=bzhin がよく用いられている。

- (28) *la.la kha.ssub=tu log=ste mu.mthud.du skyug=gin 'dug*
 N N=TRNS V=CONJN ADV V:IPF[=CONJN EXT]*prog*
 一部 腹ばいに 返って 引き続き 吐いている
 「一部の者たちは腹ばいになってずっと吐き続けている」(TD)

- (29) *dge.rgan mi.'gyur=gyi chu.zom=la chu 'chu=bzhin 'dug*
 N PSN=GEN N=DAT N V:IPF:A[=CONJN EXT]*prog*
 先生 ミンギユルの 水桶に 水 水汲みをしている
 「(姉は) ミンギユル先生の水桶に水を汲んであげていた」(LG)

ここで、4 人の作家の作品における未完了・継続相助動詞句の出現頻度をまとめてみよう。

表 9 現代チベット語 (1990年代以降) における未完了・継続相助動詞句の出現頻度

	<i>mchis</i>	<i>gda'</i>	<i>yod</i>	<i>'dug</i>	<i>yod pa red</i>
V= <i>cing</i>	0	0	0	0	0
V= <i>gin</i>	0	0	7	40	0
V= <i>gi</i>	0	0	427	242	31
V= <i>bzhin</i>	0	0	284	66	7

接続助詞 =cing は一切使われず、助動詞も *mchis* や *gda'* といった古い時代の形式も使われていないことがわかる。トンドゥブジャとは異なる方針を取っているのである。

また、作家別に使用例を集計してみると、以下のような結果となった。オンドー (WD)、タシ・パンデン (TP) といった中央チベットの作家は上述の通り、接続助詞 =gi をよく用いている他、=bzhin も用いている。一方、アムド出身の二人は傾向が異なり、ツェラン・トンドゥブ (TD) が =gin を多く用いるのに対し、ラシャムジャ (LG) は圧倒的に =bzhin を多く用いている。ただし、どの作家も共通しているのは、=bzhin を用いているという点には注目しておきたい。

表10 作家別の未完了・継続相助動詞句の出現頻度

	WD	TP	TD	LG
V= <i>cing</i> EXT	0	0	0	0
V= <i>gin</i> EXT	0	1	71	0
V= <i>gi</i> EXT	71	76	0	4
V= <i>bzhin</i> EXT	29	23	29	96

先に作家を地域別の特徴として捉えたことと関連して、1990年代から2000年代前半に編纂された小学校教科書における未完了・継続相助動詞句の出現頻度も地域別に見てみよう。ラサの教科書編纂所で作られたチベット語の教科書2冊と、西寧の教科書編纂所で作られたチベット語の教科書2冊を用い、使用されている助動詞句の頻度を集計したところ、以下の結果となった。

表11 地域別教科書における未完了・継続相助動詞句の出現頻度

	Lhasa A	Lhasa B	Amdo A	Amdo B
V= <i>cing</i> EXT	0	0	0	0
V= <i>gin</i> EXT	4	6	35	28
V= <i>gi</i> EXT	96	83	0	0
V= <i>bzhin</i> EXT	0	11	65	72

極めて限定的な調査ではあるが、ラサの教科書編纂所で作られた教科書は、ラサの作家たちの持つ傾向と同じで、接続助詞はほぼ=*gi*のみが用いられている。それはさらに遡れば、1960年代のチベット語とも傾向を一にしている。同様に、アムドの教科書編纂所で作られた教科書の傾向も、アムド出身の作家たちの持つ傾向と類似しており、接続助詞としては=*gin*か=*bzhin*が用いられおり、=*gi*は全く用いられていないということが分かった。

4 考察：使用頻度の推移

前節で、古チベット語、古典チベット語、現代チベット語の文献における未完了・継続相助動詞句の頻度を見た。以下では、本稿の主眼である未完了継続相助動詞句の歴史的な推移について、存在動詞、接続助詞に着目して見てい

く。

4.1 接続助詞に着目した出現頻度の推移

未完了・継続相助動詞句は古チベット語の時代から用いられていたが、古チベット語の時代と古典チベット語以降の時代を大きく隔てるのは、助動詞部分の割合であろう。古チベット語においては *mchis* と *'dug* が双璧で、ほぼ同じ割合で用いられていたのに対し、古典チベット語以降の時代においては、*mchis* は地位を失い、そのかわりに *yod* が *'dug* と対等の位置に立つことになる。

表12 未完了・継続相助動詞句の出現頻度の推移（助動詞編）

	-10th c.	11th-16th c.	19th c.	1960s	1980s	1990s-
V=CONJN <i>mchis</i>	52%	0 %	0 %	0 %	4 %	0 %
V=CONJN <i>gda'</i>	3 %	2 %	0 %	0 %	8 %	0 %
V=CONJN <i>yod</i>	0 %	40%	44%	52%	30%	65%
V=CONJN <i>'dug</i>	45%	58%	56%	16%	58%	32%
V=CONJN <i>yod pa red</i>	0 %	0 %	0 %	32%	0 %	3 %

助動詞句としてのこの傾向は、以下の表からも分かる通り、存在動詞の使用傾向と平行な関係となっている。

表13 存在動詞の出現頻度の推移

	-10th c.	11th-16th c.	19th c.	1960s	1980s	1990s-
<i>mchis</i>	67%	2 %	4 %	0 %	2 %	1 %
<i>gda'</i>	4 %	3 %	0 %	0 %	2 %	0 %
<i>yod</i>	20%	49%	49%	63%	56%	67%
<i>'dug</i>	9 %	46%	47%	21%	40%	30%
<i>yod pa red</i>	0 %	0 %	0 %	16%	0 %	2 %

ただし、興味深いのは、古チベット語においては、*yod* は存在動詞としての地位を確立していたのにもかかわらず、未完了・継続相の助動詞句の一部として用いられた例はなかったという点である。この *yod* が古典チベット語以降に

において未完了・継続相助動詞句の中心的存在となっていく。

4.2 助動詞に着目した出現頻度の推移

次に、未完了・継続相助動詞のうち、接続助詞部分の歴史的推移を見ていく。表はこれまでに集計したものの全体を百とした場合の割合である。

表14 未完了・継続相助動詞句の出現頻度の推移（接続助詞編）

	-10th c.	11th-16th c.	19th c.	1960s	1980s	1990s-
V= <i>cing</i> EXT	100%	39%	0 %	1 %	15%	0 %
V= <i>gin</i> EXT	0 %	22%	0 %	1 %	49%	18%
V= <i>gi</i> EXT	0 %	39%	97%	92%	8 %	38%
V= <i>bzhin</i> EXT	0 %	0 %	3 %	6 %	28%	44%

表14から明らかな通り、古チベット語においては、=*cing* またはその交替形式しか用いられていない。しかし古典チベット語になると、=*cing* 以外に=*gin*、=*gi* といった形式が現れるようになる。ところが、古典末期ともいえる19世紀にラサ出身の貴族によって書かれた伝記 (GZh) には、現代のラサ方言とほぼ同じ、=*gi* に集中し、=*cing* や=*gin* といった形式は使われていない。その一方で、たった一例ではあるが、=*bzhin* を用いた用例が現れたことが特筆すべき点である。この形式は20世紀以降、激増していくのである。1960年代の文献では、この流れを引き継ぐかのように、=*gi* が圧倒的に多く使用されている。しかし、文化大革命で表記改革、文法改革が進められたことへの反発か、1980年代に発表されたトンドゥブジャの小説を見ると、懐古主義的な傾向が見られる。1990年代以降は=*gi* と=*bzhin*、あるいは=*gin* に収束していく傾向が見られる。

1990年代以降の流れについては、地域別の小学校教科書の編纂事情ともあわせて考えていく必要があることは前節でも示した通りである。

また、方言の違いを踏まえて考察すると、=*gi* に相当する形式は現代のラサ方言で頻繁に用いられているだけでなく、実はアムド地方の各方言でも=*gi* に相当する形式が頻繁に用いられている。にもかかわらず、アムドの人びとが=*gi* を用いずに、やや文語的ともとれる=*gin* や=*bzhin* を用いるのだろうか。このあたりについては社会言語学的な調査も必要になってくるだろう。

4.3 20世紀以降急増した =bzhin を含む未完了・継続相助動詞句について

表14で見た通り、=bzhin を含む未完了・継続相助動詞句は1980年代以降急増している。その背景にはどんな問題があるのだろうか。最後にこの点について考察を加えておきたい。

まず、OTDO のコンコーダンスーを用いて古チベット語における =bzhin の使用状況について検証すると、表15に見られるようにこの時代は =bzhin に前接する語はほとんどが名詞であり、動詞も一旦名詞化してから =bzhin を伴うことが多く、動詞に直接 =bzhin が後続する例は少数であった。

表15 古チベット語における =bzhin の使用状況

	用例数	割合	具体例
N=bzhin	161	75%	<i>khirms=bzhin=du</i> N=bzhin=TRNS 法律の通りに
V=pa bzhin	47	22%	<i>zer=ba=bzhin</i> V=NMLZ=bzhin 言った通りに
V=bzhin	7	3%	<i>tshor=bzhin=du</i> V=bzhin=TRNS 気づいていながら

一方、現代チベット語における =bzhin の使用状況について調べると、完全に逆転現象が起きており、動詞に後続する用例の方が圧倒的に多くなっているのである。

表16 現代チベット語における =bzhin の使用状況

	用例数	割合	具体例
N=bzhin	158	20%	<i>bye'u.khyu=bzhin=du</i> N=bzhin=TRNS 小鳥の群れのように (LG)
V=pa bzhin	26	3%	<i>mar.khu skag=pa=bzhin=du</i> N V=NMLZ=bzhin=TRNS 溶かしたバターが固まったみたいに (LG)

V=bzhin	622	77%	gad.mo dgod=bzhin phyin song N V=bzhin V:PF AUX 笑いながら行った (LG)
---------	-----	-----	---

=bzhin が動詞に自由に後続できるようになったことと、=bzhin が助動詞句の一部として盛んに用いられるようになったことは間違いなく相関関係があるだろう。

5 まとめと今後の展望

ここまで述べてきたことは以下のようにまとめられる。

- (1) 未完了・継続相の助動詞句の使用は古チベット語まで遡ることができるが、徐々に用法が広がっていき、現代チベット語において爆発的に使用が増えた。
- (2) 存在動詞の *mchis* は古チベット語においては主たる地位を占めていたが、古典チベット語においては *yod* にその地位を奪われ、*yod* と *'dug* が双璧をなすようになり、それが現代に至るまで続いている。未完了・継続相の助動詞句の中の助動詞としての役割も同様である。
- (3) 未完了・継続相の助動詞句の中における接続助詞は、古チベット語においては =cing およびその交替形式が中心的な地位を占めていたが、古典チベット語の時代に =gi およびその交替形式や、=gin が登場し、その地位を取って代わられた。その後、19世紀から =bzhin が新たに登場し、その後徐々に勢力を増し、現代チベット語においては未完了・継続相の助動詞句の一部として欠かせない存在となっている。接続助詞の使用は地域による違いも見られる。

以上、未完了・継続相の助動詞句の推移について、極めて大雑把にはあるが検討した。大きな流れはつかむことができたのではないかと思うが、17世紀、18世紀の文献データを使っていないこと、また、19世紀の文献が1点だけであること（もちろん他の時代についても同様である）、20世紀前半の文献を扱っていないことなどは問題であり、今後の課題である。

また、本稿では便宜上、未完了・継続相の各種助動詞句を同じ機能を持つものという前提で扱ったが、形式が異なる以上、異なる意味で用いている可能性

も多いにあるので、この点の考察が不足していることは言うまでもない。
 ただ、本稿で示したような計量的な手法を用いることで、今後、各時代の様々な文法形式の使用状況が明らかになっていけば、チベット語文語の形成過程がより精緻に見えてくるであろう。

略号表

1…1 人称	INDF…不特定限定詞
2…2 人称	IPF…未完了形
3…3 人称	IPF:A…未完了能動形 (A=Actor)
ABL…起格助詞	IPF:U…未完了所動形 (U=Undergoer)
ADJ…形容詞	LOC…位格助詞
ADV…副詞、副詞句	N…名詞
AP…副助詞	NEG…否定辞
AUX…助動詞	NMLZ…名詞化助詞、名詞接尾辞
COM…共格助詞	PF…完了形
CONJN…接続助詞、副詞接尾辞	PL…複数化助詞
COP…判断動詞 (コピュラ)	<i>prog</i> …進行中、習慣反復
DAT…与格助詞	TERM…終助詞
DEM…指示詞	TOP…提題副助詞
ERG…能格助詞	TRNS…到格助詞
EXT…存在動詞	V…動詞
GEN…属格助詞	#…語境界
HON…敬語形	=…接語境界
HS…伝聞	-…形態素境界 (文法グロスの場合)
HUM…謙讓語形	
IMPR…命令形	

※V:IPF は動詞の未完了形、V:HON は動詞の敬語形、1=ERG は1 人称に能格助詞の独立形式が接語として付されたもの、1.ERG は1 人称と能格助詞の結合形式 (音声的に融合しているもの) となる。

参考文献

[藏文]

Skal bzang 'gyur med. (1981). *Bod kyi brda sprod rig pa'i khrid rgyun rab gsal me*

long/《藏文文法教程》成都：四川民族出版社。

[日文]

- 稲葉正就 (1986). 『チベット語古典文法学』(改訂増補版) 京都：法蔵館。
- 武内紹人 (1990). 「チベット語の述部における助動詞の機能とその発達過程」、
崎山理編 『アジアの諸言語と一般言語学』 東京：三省堂。
- 星泉 (2010). 「14世紀チベット語文献『王統明示鏡』における存在動詞」 東京
大学言語学論集 (29) pp.29-68.
- 星泉 (2016). 『チベット語古典文法：『王統明教史』(14世紀)に基づいて』 東
京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 山口瑞鳳 (1998). 『チベット語文語文法』 東京：春秋社。

[欧文]

- Bacot, Jacques. (1948). *Grammaire du tibétan littéraire*. 2 vols. Paris: Librairie
d'Amérique et d'Orient.
- Beyer, Stephan. (1992). *The classical Tibetan language*. NY: SUNY Press.
- Denwood, Philip. (1999). *Tibetan*. London Oriental and African Language Library Vol.
3. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Jäschke, Heinrich August. (1881). *A Tibetan-English dictionary, with special reference
to the prevailing dialects: To which is added an English-Tibetan vocabulary*.
LONDON: Unger Brothers (T. Grimm).
- Jäschke, Heinrich August. (1883). *Tibetan grammar*. Volume 7 of Trübner's collection
of simplified grammars. Second edition prepared by Heinrich Wenzel.
LONDON: Trübner & co..
- Zeisler, Bettina. (2004). *Relative Tense and Aspectual Values in Tibetan Languages: A
Comparative Study*. Walter de Gruyter.

星 泉 (ほし いずみ)
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

岩尾一史・池田 巧 (編)
『チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開』
京都大学人文科学研究所 2018年3月刊
